

西中郷遺跡発掘調査報告書 2

—宅地造成工事に係る発掘調査—

2023

特定非営利活動法人 広島文化財センター

例 言

1. 本書は、令和5年度に特定非営利活動法人広島文化財センター（以下「広島文化財センター」という）が調査を実施した西中郷遺跡(東広島市西条町田口字西中郷)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及びこれに伴う整理・報告書作成作業は、株式会社ゴールデン・ゲートより委託を受けて、広島文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は演岡大輔が担当し、事務に関する業務は広島文化財センター事務局が行った。整理作業及び、遺物実測・写真撮影・編集等、報告書作成に関するすべての作業を演岡が行った。
4. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図(清水原)を使用した。また、第3図は東広島市発行の東広島市地形図(S-7・R-7) 1/2,500を元に加筆修正したものを使用している。
5. 本書で使用した方位は、世界測地系座標(平面直角座標第Ⅲ系)北である。
6. 土層図及び土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修による『新版標準土色帖』を用いた。
9. 調査で得られた出土遺物・実測図・写真等の資料は、東広島市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては、次の方々や関係機関からご指導、ご助言を賜った。
記して謝意にかえたい。(五十音順)
楳木敬太 高下洋一 日原絵里
公益財団法人広島市文化財団文化科学科文化財課 東広島市教育委員会生涯学習部文化課
11. 報告書掲載のイラストについては事業主である株式会社ゴールデン・ゲートから紹介のあったポップカルチャースタジオ未来図から提供していただいた。イラストは調査区周辺の環境及び調査成果の概要を参考にしたイメージ図である。

西中郷遺跡発掘調査報告書 2

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	5
IV 遺構と遺物	9
V まとめ	18

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	3
第2図 西中郷遺跡調査区位置図	6
第3図 遺構配置図	7
第4図 調査区東壁土層断面図	8
第5図 調査区南壁・西壁土層図	9
第6図 SK1・SK2・SX1遺構実測図	10
第7図 SK3遺構実測図	11
第8図 SK4遺構実測図	11
第9図 SA1・SB1・SB2遺構実測図	12
第10図 SD1～3遺構実測図	13
第11図 SD4遺構実測図	14
第12図 SX2遺構実測図	14
第13図 SX3遺構実測図	15
第14図 遺物実測図	16

図版目次

図版1

- 調査区全景3Dモデルオルソ平面
(真上から)

図版2

- a. 調査前風景(南から)
- b. 調査区全景(北から)

図版3

- a. 調査区全景(南から)
- b. 調査区全景(北から)
- c. 調査区南壁土層断面(北東から)

図版4

- a. 調査区東壁土層断面(西から)
- b. 調査区西壁土層断面(北東から)
- c. SK1・SK2・SX1完掘状況(南東から)

図版5

- a. SK1土層断面(北から)
- b. SK2土層断面(南から)
- c. SK3完掘状況(南から)

図版6

- a. SK3土層断面(北から)
- b. SK4完掘状況(南から)
- c. SK4土層断面(南東から)

図版7

- a. SA1・SB1・SB2完掘状況(南から)
- b. SA1・SB1・SB2完掘状況(西から)
- c. SB1・SB2根石検出状況(南西から)

図版8

- a. SB1-P1土層断面(北から)
- b. SB1-P2根石下段検出状況(西から)
- c. SB1-P2土層断面(西から)

図版9

- a. SD1～3完掘状況(北東から)
- b. SD1～3土層断面(西から)
- c. SD4完掘状況(北東から)

図版10

- a. SD4土層断面(北東から)
- b. SX2完掘状況(北西から)
- c. SX2土層断面(南西から)

図版11

- a. SX3簀出土状況(東から)
- b. SX3完掘状況(南西から)
- c. SX3土層断面(北から)

図版12

出土遺物1

図版13

出土遺物2

1 はじめに

西中郷遺跡は、宅地造成事業に伴い、広島県東広島市西条町田口字西中郷で発掘調査を実施した。以下、調査に至る経緯を概述する。

事業主である株式会社ゴールデン・ゲート（以下、事業者という。）から、令和4年10月27日付けで埋蔵文化財の有無について確認するための調査依頼があり、市教委が遺構等の広がりを確認するための調査を行い、遺構が残存することが確認された。

この後、事業者と市教委で現状保存のため協議を重ねたが、事業を取りやめることは難しく、現状での保存は困難との結論に達した。このため令和5年1月12日付けで事業者から埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第93条第1項）を提出し、宅地内道路部分については記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨、市教委から令和5年2月27日付け東広教文第353号で通知があった。

これを受けて令和5年3月2日付けで事業者から本遺跡の発掘調査を受託した特定非営利活動法人広島文化財センターは、埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第92条）を行い、市教委から令和5年3月3日付け東広教文第409号で慎重に発掘調査を実施する旨の通知があった。その後、令和5年4月3日から同年4月25日まで発掘調査（現地調査）を実施し、同年4月25日に市教委に終了報告書及び出土文化財保管証を提出し、東広島警察署に埋蔵文化財（遺物）発見届を提出した。

報告書作成作業及び整理作業は、令和5年4月26日から令和5年7月31日にかけて実施した。

本報告書は、以上のような経緯を経て、実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用いただければ幸いである。また、事業委託者である株式会社ゴールデン・ゲートには調査の重要性を理解し、各種の便宜を図っていただき、多大な協力を得た。



作業風景

II 位置と環境

西中郷遺跡は、東広島市西条町田口字西中郷に所在する遺跡である。本遺跡の北には、標高335mの鏡山、標高331mのガガラ山が位置しており、南側には西から東へと古河川が流れ、約650m南東で黒瀬川に合流する。北側の丘陵には広島大学のキャンパスが広がっており、その麓には東西に県道331号線(下三永吉川線)が通っており、その道路に面している。西中郷遺跡は、西ガガラ山から派生した丘陵の麓の古河川流域の緩斜面に広がる水田地帯に位置しており、広島大学が東広島キャンパスに移転により、開発が急速に進んだ地域である。

周辺の遺跡については、第1図の範囲で概観する。なお、遺跡名に付けられた[番号]は第1図の遺跡番号と同じである。

旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、広島大学構内の鴻の巣遺跡[16]⁽¹⁾、西ガガラ遺跡第1地点・同第2地点[27]⁽²⁾が調査されており石器群や遺構が検出されている。

縄文時代の遺跡も広島大学構内の鴻の巣遺跡、西ガガラ遺跡第1地点、山中池南遺跡第1地点、同第2地点、同第6地点[26]⁽³⁾、鴻の巣南遺跡[17]⁽⁴⁾、ぶどう池南遺跡第2地点[19]⁽⁵⁾など早期を中心に早期から後期の多くの遺跡が調査されている。

弥生時代

黄幡1号遺跡[29]⁽⁶⁾では木樋を伴った水路遺構が検出されており、その埋土や水路遺構の下層から前期後半から中期にかけての大量の弥生土器や木器が出土している。中期から後期にかけては大槨1号遺跡⁽⁷⁾・鴻の巣遺跡・助平2号遺跡⁽⁸⁾などで住居跡が検出されている。後期の遺跡には、鏡西谷遺跡[37]⁽⁹⁾・鴻の巣南遺跡などがある。

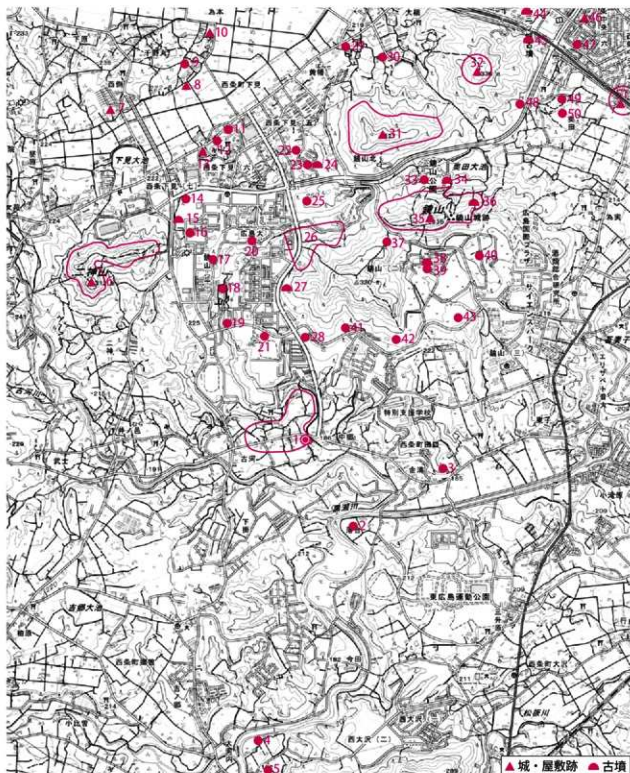
墳墓については、中期以前は調査例が少なく、本調査区周辺には類例は見当たらない。山中遺跡[25]⁽¹⁰⁾から出土した箱式石棺墓1基・土坑墓11基は、遺物が出土しなかったが構成墳墓や周辺遺跡の土器の出土状況から、中期末～後期前葉に位置づけられている。陣が平西2号遺跡[22]⁽¹¹⁾で検出された4基の木棺墓も中期末と考えられている。後期になると多くの遺跡があり、箱式石棺・石蓋土墳墓・土坑墓・土器棺墓など様々な埋葬主体が用いられている。また、陣が平西2号遺跡では、西条盆地内では初めてとなる弥生時代終末期～古墳時代初頭頃と考えられる貼石墳丘墓が検出されている。

古墳時代

古墳時代前期の遺跡は、高屋町や西条盆地北東部に集中している。中期には全長92mの前方後円墳である三ツ城古墳[44]⁽¹²⁾が築造され、他にも八幡山大池古墳[45]⁽¹³⁾、大槨第1号古墳⁽¹⁴⁾、大槨第3号古墳⁽¹⁵⁾が築造された。他にも箱式石棺を主体とした古墳も多く認められるが、副葬品が伴わないものも多く、小地域を代表する首長墓と想定されるものが多いようである。

後期の古墳には助平古墳⁽¹⁶⁾・奥田大池古墳[34]⁽¹⁷⁾・大槨第2号古墳⁽¹⁸⁾・鏡東谷古墳[38]⁽¹⁹⁾などがある。

集落遺跡では、助平3号遺跡⁽²⁰⁾が中期から後期にかけて継続して形成されている。広島大学構内



1. 西中郷道跡 2. 落合道跡 3. 西東子道跡 4. 大河内2号道跡 5. 大河内1号道跡 6. 二神山城跡
7. 尾崎土居屋敷跡 8. 山崎土居屋敷跡 9. 西側道跡 10. 中野垣内屋敷跡 11. 鴻巣東1号道跡 12. 鴻巣東2号道跡
13. 監屋敷跡 14. 湖の東北道跡 15. 湖の果古墳 16. 湖の果道跡 17. 湖の果南道跡 18. ぶどう池南道跡 (第1地点)
19. ぶどう池南道跡 (第2地点) 20. 平木池道跡 21. 新池道跡 22. 陣が平西2号道跡 23. 陣が平西道跡
24. 陣が平古墳 25. 山中道跡 26. 山中池南道跡 27. 西ガガラ道跡 28. 西ガガラ古墳 29. 黄幡1号道跡
30. 黄幡2号道跡 31. 陣が平山城跡 32. 八幡山城跡 33. 奥田大池道跡 34. 奥田大池古墳 35. 鏡山城跡
36. 鏡山古墳 37. 鏡西谷道跡 38. 鏡東谷古墳 39. 鏡東谷道跡 40. 鏡千人塚道跡 41. 東ガガラ道跡 42. 東ガガラ窟跡
43. 清水奥谷道跡 44. 三ツ城古墳 45. 八幡山大池古墳 46. 狐ヶ城跡 47. 古市4号道跡 48. 八幡山宮下道跡
49. 卯留2号道跡 50. 卯留1号道跡 51. 道照道跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

の平木池遺跡[20]⁽²¹⁾・陣ヶ平西遺跡[23]・山中池南遺跡第2地点では、6世紀後葉前後に成立し、短期間に廃絶されている。また、陣ヶ平西遺跡・山中池南遺跡第2地点では須恵器焼成窯跡が検出されている。

古代以降

古代以降では、東ガガラ窯跡[42]⁽²²⁾、陣ヶ平西遺跡2号窯跡から古代の須恵器窯が調査されている。中世では、山口に本拠を置く大内氏が西条盆地を東方進出の拠点としており、盆地中央に位置する鏡山に鏡山城[35]を築いている。また、鏡山城に関連すると思われる八幡山城跡[32]、陣ヶ平山城跡[31]、二神山城跡[6]が築かれ、武士の館として道照遺跡[51]などの居館跡も確認されている。

註

- (1) 藤野次史・植林啓介「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』2007年
- (2) 藤野次史・中村真理「西ガガラ遺跡第1地点の調査」「西ガガラ遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』2004年
- (3) 藤野次史・植林啓介「山中池南遺跡第1地点の調査」「山中池南遺跡第2地点の調査」「山中池南遺跡第6地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－山中地区の調査－』2005年
- (4) 藤野次史・植林啓介「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』2007年
- (5) 藤野次史・植林啓介「ぶどう池南遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』2007年
- (6) 鍛冶益生編「西条下見黄幡1号遺跡発掘調査報告書」文化財センター調査報告書第47冊 2005年
- (7) 妹尾四三「大槓1号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(第1) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集 1993年
- (8) 植田千住穂編「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)」広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1983年
- 石井隆博編「西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」東広島市教育委員会 1993年
- (9) 藤野次史・増田直人「広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 2003年
- (10) 藤野次史編「広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報Ⅳ」広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会 1985年
- (11) 植田広・杉原亮生「陣ヶ平西2号遺跡発掘調査報告書」東広島市教育委員会文化財調査報告書第51集 2015年
- 新岡大輔「陣ヶ平西2号遺跡発掘調査報告書2」特定非営利活動法人広島文化財センター 2016年
- (12) 石井隆博「史跡三ツ城古墳発掘調査報告書」財団法人東広島市教育文化振興事業団 2004年
- (13) 梅本健治編「道照遺跡 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1982年
- (14) (7)と同じ
- (15) 道上康人編「大槓遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1985年
- (16) (8)と同じ
- (17) 道上康人編「奥田大池遺跡」広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1983年
- (18) (15)と同じ
- (19) 藤野次史・増田直人「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 2003年
- (20) 青山透「助平3号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集 1992年
- 佐々木直彦・松村昌彦「助平3号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集 1993年
- (21) 植田千住穂編「平木池遺跡発掘調査報告」広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1982年
- (22) 植田千住穂・佐々木直彦「東ガガラ窯跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡・東ガガラ窯跡・鏡ヶ平山遺跡』広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学 1982年

III 調査の概要

1 調査の方法と経過

本遺跡は、東広島市西条町田口字西中郷のガガラ山から南に派生した丘陵の麓と西から東に流れる古河川の間に位置しており、本調査区の西側では2008年に東広島市教育委員会・財団法人東広島市教育文化振興事業団によって、ほ場区画整理に伴う発掘調査(調査面積200㎡)が実施されている。調査区は2ヶ所あり、溝や土坑や柱穴などの遺構が検出されており、遺物の出土数は少ないが、溝からは14世紀代の瓦器碗や備前焼播鉢が出土し、包含層から須恵器や弥生土器片が出土している。

本調査区のほぼ中心あたり(X=-178384m)が土地の境界となっており、調査前は県道331号線に面した北側の土地は宅地で、南側の土地は水田であった。発掘調査は宅地造成工事に伴うもので、分譲住宅の共用道路部分のみを行い、市教委によって実施された試掘成果に基づき、調査を実施した。

発掘調査の対象面積は392.5㎡で、調査期間は令和5年4月3日から同年4月25日である。調査は重機により遺構面のやや上まで掘削を行い、遺構を検出し、遺構掘削と並行して写真撮影や図化作業を行った。図化作業に関しては調査区全体および遺構の完掘状況と土層断面はフォトグラメトリーによる3Dモデルを作成し記録した。市教委による検査(4月21日)を受けた後、最後に調査区の部分拡張を行い、調査を終了した。

遺構としては柵列1条、掘立柱建物跡2棟、土坑4基、溝4条、落込み状遺構3基、ピットを検出した。遺物は陶磁器、土師質土器、須恵器、弥生土器が出土したが細片が多く、図化できたものは少ない。

2 基本層序

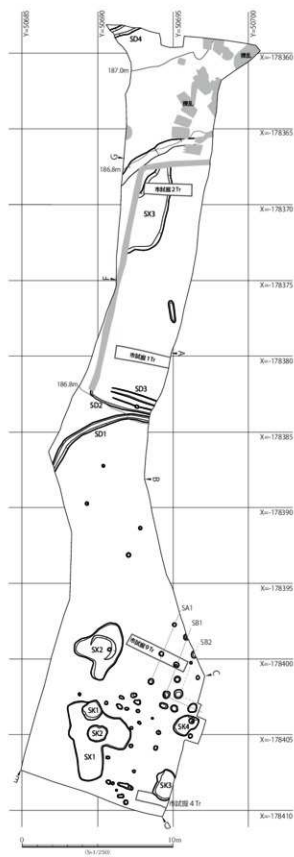
本調査区は北側と南側で層位が異なる。北側は調査前は宅地であり、宅地以前は耕作地であったようであるが、住宅解体に伴い、住宅基礎及び植栽の撤去作業により遺構面近くまで攪乱された状態であった。南側は水田であったため層序は明瞭であったため、調査区の南側部分を基本層序とする。

遺構検出面は調査区の北側(X=-178366m付近から北側)が標高187.0mとやや高く、他の場所はほぼ186.8mと平坦である。

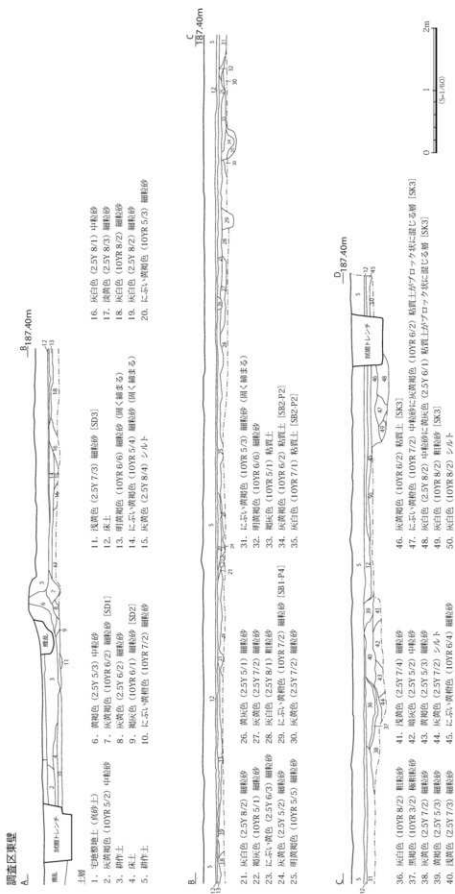
地表面から遺構検出面までの深さは約40cmである。本遺跡の基本層序は、上から第1層が深さ20～25cmの水田耕作土である。第2層が深さ5～10cmの水田床土、第3層が深さ10～15cmの細かい黄褐色細粒砂である。第3層目及びその下層は調査区の中で場所ごとに異なっており、調査区北側では粘土で、調査区の中央から南にかけては粗粒砂～シルトまで様々な粒度の異なる砂の堆積が認められる。このように粒度の異なる砂の堆積が確認できることから、本調査区周辺は調査区の南側を西から東へと流れる古河川による河川氾濫によって形成されたと考えられる。



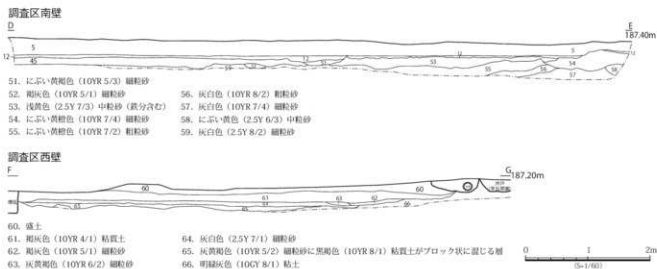
第2図 西中瀬調査区位置図(1:2,500)



第3図 遺構配置図 (1:250)



第4図 調査区東壁土層断面図 (1:60)



第5図 調査区南壁・西壁土層断面図 (1:60)

IV 遺構と遺物

本調査区では、土坑4基(SK1~4)、柵列1条(SA1)、掘立柱建物跡2棟(SB1・2)、溝状遺構4条(SD1~4)、落ち込み状遺構3基(SX1~3)を検出した。遺物は磁器皿、陶器碗、土師質土器甕・鍋・搦鉢、須恵器杯、弥生土器甕、銅製簪が出土した。

1. 土坑

SK1 (第6図、図版4c・5a)

SK1は調査区の南側 (X=-178403m Y=50690m)、SK2の北側に位置している土坑である。平面形態は隅丸方形で一辺1.2m、深さ25cmである。床面はほぼ平坦で、中央よりやや南側に10~30cm大の礫が3つ置かれていた。遺物は検出面から25cm大の土師質土器甕の胴部破片が出土した他、土師質土器甕の破片が出土した。

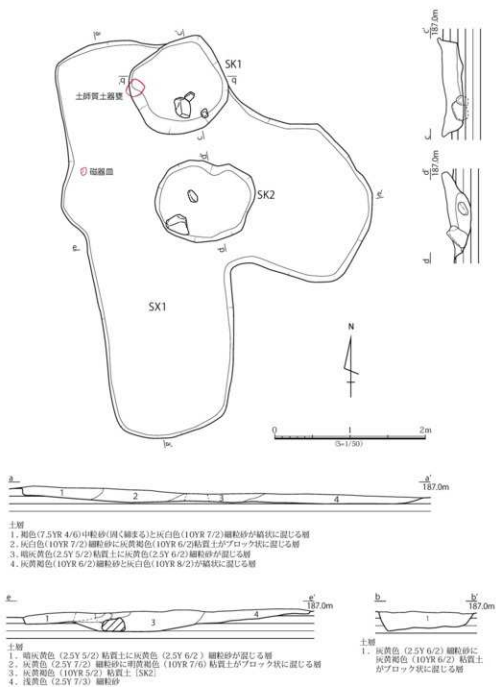
SK2 (第6図、図版4c・5b)

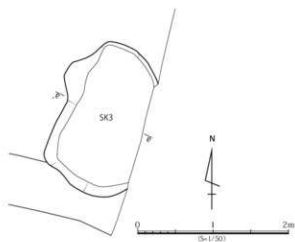
SK2は調査区の南側 (X=-178405m Y=50690m)、SK1の南側に位置している土坑である。平面形態は隅丸長方形で、長軸長さ1.2m、短軸長さ1.05m、深さは34cmである。床面はやや中央が窪んでおり、南側の肩付近くに30cm大の礫が置かれている。遺物は土師質土器甕やその破片が出土した。

出土遺物

土師質土器(第14図3)

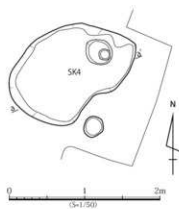
3は甕の口縁部である。残存高9.3cm。口縁端部は内外面はユビオサエの後に横ナデが施されている。胴部は外面では板状工具によるタキキ痕跡が縦方向に残り、内面では横方向を主体としたハケ目調整が施されている。





- 土層
 1. 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 細粒砂(よく締まる) 4. 灰白色(2.5Y 8/2) 細粒砂
 2. 灰白色(10YR 8/2) 中粒砂 5. 灰黄色(2.5Y 6/2) 細粒砂(よく締まる)
 3. 黄灰色(2.5Y 6/1) 細粒砂 6. 灰黄色(2.5Y 7/2) 細粒砂(少し緩い)

第7図 SK3 遺構実測図 (1:50)



- 土層
 1. 黄灰色(2.5Y 6/1) 細粒砂 4. 灰色(5Y 6/1) シルト
 2. 灰白色(7.5Y 8/2) シルト 5. 灰白色(2.5Y 8/2) 細粒砂
 3. 灰白色(5Y 6/1) 細粒砂 6. にぶい黄色(2.5Y 6/4) 中粒砂

第8図 SK4 遺構実測図 (1:50)

SK3 (第7図、図版5c・6a)

SK3は調査区南東隅(X=-178408m Y=50694.5m)に位置している土坑である。平面形態は隅丸長方形で、長軸長さ2.0m、短軸長さ1.2m以上、深さ30cmである。遺物は磁器片が出土した。

SK4 (第8図、図版6b・c)

SK4は調査区南東(X=-178404.5m Y=50696m)、SK3の北側に位置している土坑である。平面形態は不整形な楕円形で、長軸長さ1.75m、短軸長さ1.05m、深さ22cmである。遺物は磁器片、瓦質土器鍋片、土師質土器片、須恵器裏片が出土した。

2. 柵列

SA1 (第9図、図版7a・b)

SA1は調査区南側(X=-178397~-178401.5m Y=50693.5~50695m)、建物跡SB1の西側、落ち込み状遺構SX2の東側に位置する柵列である。柱穴3つ(P1~3)からなり、北北東-南南西の向きにほぼ2m(6尺5寸)間隔で並ぶ。柱穴の平面形はすべて円形で、P1は径36cm、深さ14cm、P2は径30cm、深さ30cm、P3は径25cm、深さ12cmである。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

3. 掘立柱建物跡

SB1 (第9図、図版7・8)

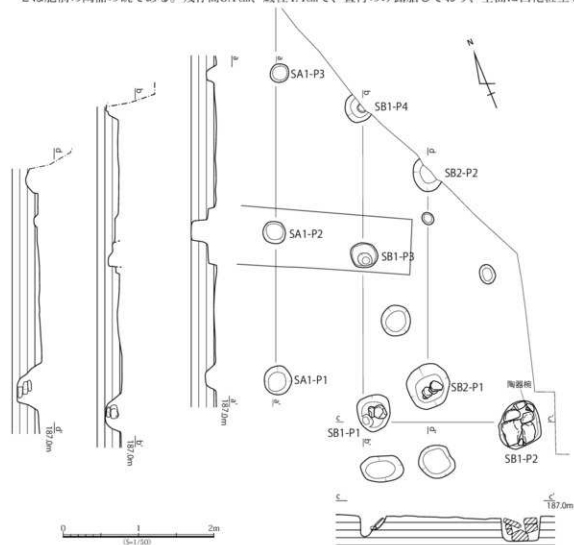
SB1は調査区南側(X=-178398.5~-178403.5m Y=50694.5~50696.5m)、柵列SA1の東側、

土坑SK4の北側に位置する。建物の長軸は北北東—南南西の向きで柵列SA1と並行している。建物の検出できた範囲で部分的で、東西1間(P1-2)以上、南北2間(P1-P3-P4)以上の規模となる。柱穴の間隔はほぼ2m(6尺5寸)であるが、P1とP3間が2.1mでやや広い。P1は平面形が不整形な楕円形で長軸48cm、短軸44cm、深さ20cmで30cm大の根石が2石重なる。P2は平面形が不整形な楕円形で長軸64cm、短軸52cm、深さ32cmで、やや中央に窪みが認められるも10～30cm大の礫を隙間なく柱穴内に充填している。P3は平面形が楕円形で長軸35cm、短軸32cm、深さ14cmである。P4は平面形が推定楕円形で短軸38cm、深さ20cmである。遺物はP1から土師質土器鍋(第14図5)・播鉢片、P2から陶器碗(第14図2)、陶器片が出土した。

出土遺物

陶器(第14図2)

2は肥前の陶器の碗である。残存高3.1cm、底径4.4cmで、畳付のみ露胎しており、全面に白化粧土を刷毛



第9図 SA1・SB1・SB2 遺構実測図(1:50)

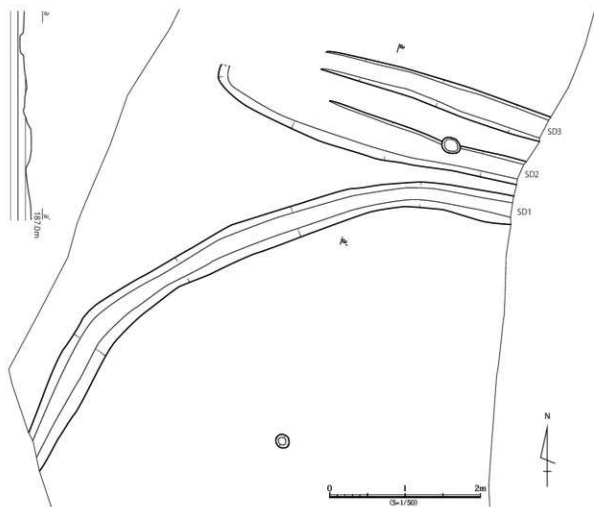
目塗りした刷毛目文が施されている。

土師質土器(第14図5)

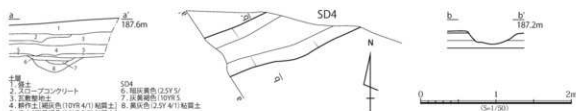
5は鍋の口縁部である。残存高4.1cmで、内面に横方向のハケ目調整が施されている。

SB2 (第9図 図版7)

SB2は調査区南側(X=-178394.5~-178402.5m, Y=50695~50696.5m)、SB1のやや東側で重複した位置関係にある。東西方向の規模は調査区の関係で確認できなかったが、柱穴P1に根石があることや、柱穴の大きさがSB1と同規模であることから掘立柱建物と判断した。SB1と同様に主軸方向は北北東-南南西の向きとなる。柱穴の間隔は約2.7m(9尺)である。P1は平面形が楕円形で、長軸60cm、短軸55cm、深さ30cmで、10~15cm大の根石が3石重なった状態であった。P2は平面形が推定楕円形で、長軸約40cm、短軸約30cm、深さ25cmである。遺物はP1から陶器片、土師質土器裏片が出土した。



第10図 SD1~3遺構実測図(1:50)



第 11 図 SD4 遺構実測図 (1:50)

3 溝状遺構

SD1 (第10図、図版9a・b)

SD1は調査区の中央($X=-178384 \sim -178387.5$ $Y=50687 \sim 50693.5$)に位置している。検出した長さは約7m、幅30～54cm、深さ15cmで、南西から北東方向に向けて弧を描くように曲がっている。遺物は出土しなかった。

SD2・3 (第10図 図版9a・b)

SD2・3は調査区の中央($X=-178382.5$ $Y=50690 \sim 50694$ あたり)、SD1の北側に位置しており、北西-南東の向きに並行して延びている。幅30～50cm、深さ5～10cmである。土層の層序からSD3からSD2の順で形成されている。共に遺物は出土しなかった。

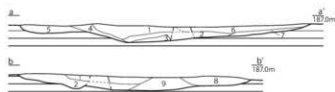
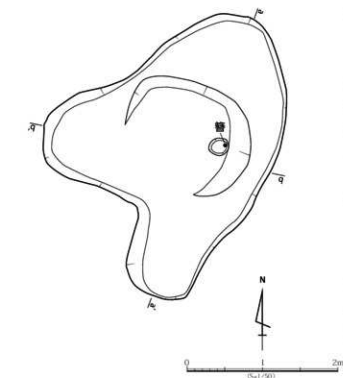
SD4 (第11図 図版9c・10a)

SD4は調査区北西端($X=-178358.5$ $Y=50691 \sim 50693$)に位置しており、西南西-東北東の向きに延びる。検出長は1.95m、幅60～75cm、深さ20cmである。遺物は出土しなかった。

落ち込み状遺構

SX1 (第6図、図版4c)

SX1は調査区南側中央($X=-178403 \sim -178408$ $Y=50688 \sim 50692$)に



- 土層
1. 灰黄褐色(10YR 5/2)細粒砂
 2. 灰白色(10YR 8/2)中粒砂(少し粘るい)
 3. 黄灰色(10YR 5/1)細粒砂(少し粘性あり)
 4. 灰白色(10YR 8/2)細粒砂
 5. におい黄褐色(7.5YR 5/4)細粒砂と灰黄褐色(10YR 6/2)細粒砂が混じる層
 6. におい黄褐色(10YR 5/4)細粒砂
 7. 灰白色(10YR 8/2)細粒砂と黄灰色(10YR 5/1)細粒砂が陥状になる層
 8. 黄灰色(10YR 5/1)中粒砂(少し粘性あり)
 9. 明褐色(7.5YR 5/6)細粒砂(少し粘性あり、下面に鉄分の沈着層あり)

第 12 図 SX2 遺構実測図 (1:50)

位置し、土坑SK1・2を内包する凸形を呈する南北長5.4m、東西長3.8m、深さ7cmの浅い落ち込みである。土坑SK1・2と同時に埋没しており、SK1・2と一連の遺構であると考えられる。遺物は磁器皿(第14図1)が検出面から出土した。

出土遺物

磁器(第14図1)

1は肥前系の染付皿である。口径12.0cm(復元値)、器高3.2cm、底径4.6cm(復元値)で、内・外面に釉薬がかかり、高台の周囲は露胎している。見込みは蛇の目軸剥ぎが施されている。

SX2(第12図、図版10b・10c)

SX2は調査区南側中央(X=-178398 ~ -178401.5m Y=50688.5 ~ 50691.5m)、土坑SK1の北側、柵列SA1の西側に位置する落ち込みである。平面形は凸形を呈し、南北長3.8m、東西長3.2m、深さ20cmである。底面の中央がやや隅丸方形に窪む。ビット状の窪みから簪(第14図11)が先端を下に向け立位の状態で出土した。

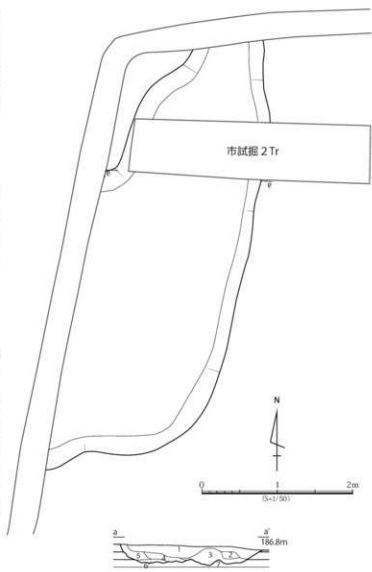
出土遺物

簪(第14図11)

11は金属製の簪である。全長19.15cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm(飾のある箇所は0.5cm)、重さ22.0gである。片側の端部が耳かき状になっている。一段彫り窪めた箇所には、魚々子文が施され、そこに意匠不明の別造りの飾(2.3×0.8×0.3cm)が鋳付けされている。表面の錆が酷く状態が悪いが金メッキが施された金銅製の可能性が高い。

SX3(第13図、図版11b・c)

SX3は調査区北側中央(X=-178367 ~ -178373m Y=50692 ~ 50695m)に位置している落



- 土層
1. 暗灰色(2.5Y 5/2)細粒砂に灰黄色(2.5Y 7/2)粗粒砂が混じる層
 2. 黒褐色(10YR 3/1)粘土
 3. 暗灰色(10YR 5/1)細粒砂に灰黄色(10YR 7/3)粗粒砂が混じる層
 4. 黄灰色(2.5Y 5/1)細粒砂
 5. 暗灰色(10YR 4/1)細粒砂
 6. 黄灰色(2.5Y 6/1)細粒砂に灰白色(5Y 7/1)シルトが凝状に混じる層
 7. 灰白色(2.5Y 8/1)シルトに暗黄褐色(2.5Y 7/6)鉄分が凝状に混じる層

第13図 SX3遺構実測図(1:50)

ち込みである。平面形態は不整形な長楕円形を呈し、南北長5.5m、東西長0.92～2.1m、深さ25cmである。北端と西側は現代の溝により削平されている。遺物は土師質土器(第14図4)、弥生土器(第14図9・10)が出土した。

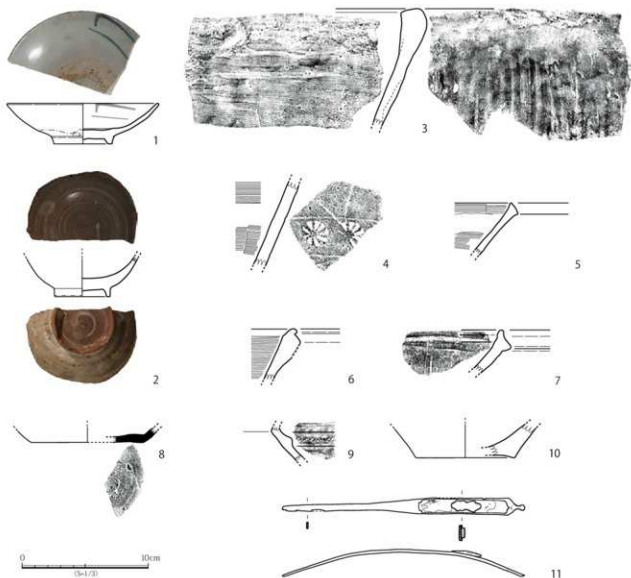
出土遺物

土師質土器(第14図4)

4は、甕の胴部である。残存高6.7cmで、外面には2条の沈線の中に菊文(9弁)のスタンプが連続して押されており、内面には横方向のハケ目調整が施されている。

弥生土器(第14図9・10)

9は甕の頸部である。頸部のやや下側に刻み目が施された突帯がつく。10は甕の底部である。



第14図 遺物実測図(1:3)

遺構外から出土した遺物(第14図6・7・8)

6は土師質土器の鍋である。残存高4.0cmで、口縁外面にはヘラ状工具により沈線が入れられ、口縁内面端部はヘラケズリにより面取り、それより下部は横方向のハケ目調整が施されている。

7は土師質土器の播鉢である。残存高3.4cmで、内外面にヨコナデ、内面に5条1単位の摺目が施されている。

8は須恵器の坏身である。復元底径8.8cm、残存高1.15cmで、内面から底部の一部分まで回転ロケロナデが施されており、底部の中央付近はヘラ切りである。

V まとめ

今回の西中郷遺跡の発掘調査では、392.5㎡を調査し、土坑4基、櫛列1条、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構4条、落込み状遺構3基、ピットを検出した。出土した遺物は、磁器皿、陶器碗、土師質土器甕・鍋・摺鉢、須恵器・弥生土器の土器類や金属製品である筈がある。ここでは、僅かではあるが検出した遺構について時期や性格について検討し、まとめとしたい。

検出した遺構は建物・溝状遺構を除き同様の埋土で、同一時期のものと考えられ、わずかに出土した遺物から18世紀後半以降と考えられる。金属製の筈は先端が耳かき状になっており、この形状のものが流行しはじめるのが正徳～享保(1711～1736)年間頃とされており、使用から地中に埋没するまでの期間を考慮すると土器から想定される年代と同じ頃のものと考えられる。土師質土器鍋や須恵器や弥生土器など古い時期の遺物も出土したが、いずれも細片で西中郷遺跡の中心域である北西部から流入したものと推測される。

遺構は調査区の南側に集中しており、建物跡を検出したことから近世の一定期間、生活の中心は調査区の南側部分であり、道路(県道下三永・吉川線)付近は耕作地であったようである。この道は、『芸藩通志』の田口村の絵図にも描かれていることから、近世には道から少し離れた位置に家屋が築かれていたようである。

溝状遺構SD1～3は、現状の土地の境界(宅地と水田)の直下に位置しており、古くから土地を区画する溝として機能していたと考えられる。

2棟検出した掘立柱建物は、SB1が柱間の間隔が約2.0m(6尺5寸)で西側に位置する櫛列SA1と同間隔で建てられているのに対しSB2の柱間は約2.7m(9尺)とかなり広く、SB2はSB1よりも古い時期と想定される。また、地面が締まっていない箇所では、柱を据える柱穴内には柱の沈下を防ぐために根石を多く充填しているという特徴が認められる。

6尺5寸の柱間で建てられた掘立柱建物の類例として溝口1号遺跡のSB5(桁行4間×梁行2間:17世紀後半から18世紀前半)がある。三浦正幸氏によると「中心となる上屋部分の柱穴は、直径約60cm(2尺)もある巨大なものであって、一般の農家主屋をはるかに上回る建ちの相当に高い建物であったと考えられる。」とあり、農家主屋以外の鍛冶などに用いられた工場の建物などを想定している。また、柱間寸法が6尺5寸であることに関しては、「当地方の18世紀以前の農家主屋が1間を6尺3寸、寛文5年(1665)の日本原家住宅(東広島市高屋町白市に所在する町家)が1間6尺4寸とするのより大きく、年代的にこれより古い可能性もあるが、柱形が異様に大きいので断定はできない。」としている。本調査区で検出した掘立柱建物は南西の角部分のみで建物の全容は不明で、鍛冶などの工場であったことを裏付ける遺物(道具、鉄滓、炭などの炭化物、炉壁片、火を扱った痕跡など)は何も出土しなかったため、主屋や工場など建物の性格について推測するのは困難である。同一規格(6尺5寸)で建てられた更なる資料の増加が望まれる。

建物群の西側に位置する土坑群(SK1・2)は、建物から約4m離れた位置にあり、土坑が重なり合うことなく2基が並列した状態で検出された。両土坑から土師質土器甕の破片が出土していることから甕が据えられていたと考えられる土坑である。建物と近接した位置にあり、土師質土器の甕が埋設

されていたことから廁または肥溜(野壺)と考えられる。建物近くに土坑を並列して配する事例は東広島市内では大槓1号遺跡(西条町)・溝口1号遺跡(高屋町)でも確認されている。溝口1号遺跡ではSB1とSK35～37、SB5とSK70～72、大槓1号遺跡ではSB4とSK3・4、SK6～8があり、埋桶もしくは埋甕が2個ないし3個一対にして設けられている。個数の違いは作り直しが行われたものと、当初から3個作られたものがあり、後者の内の1つは肥えを薄めるための雨水を溜めておくための甕又は桶を据えていたとも考えられる。

建物は近くに確認できないが、土坑が2ないし3基整列している例として、道照遺跡(西条町)・小谷黄幡遺跡(高屋町)がある。道照遺跡ではSK01・02、SK06・07があり、SK01を除く土坑からは八本松原周辺で焼かれたと考えられる甕を用いた廁が想定されている。小谷黄幡遺跡ではA調査区のSK5・6、SK7・8があり、SK6から土師質土器の甕が出土しており、江戸時代後期頃と考えられている。建物近くにあるものが「廁」、建物から離れた位置にあるものを「野壺」として捉えておきたいが、これらの遺構が廁または肥溜めに関する遺構かどうかはまだ断言はできず、今後の調査で同様の土坑を検出した場合、土坑埋土の土壌分析を行い検証できるデータを増やしていく必要がある。

今回の調査では、近世の農家の遺構を確認することができた。東広島市では街道沿いの四日市遺跡といった近世の人口の集中する遺跡が調査されており、町の様相は徐々に明らかになってきているが、その周辺に位置する近郊農家の様相は、まだ不明な点が多いのが現状である。そのような中、僅かな調査面積であったが、新しい知見を得ることができた。

参考文献

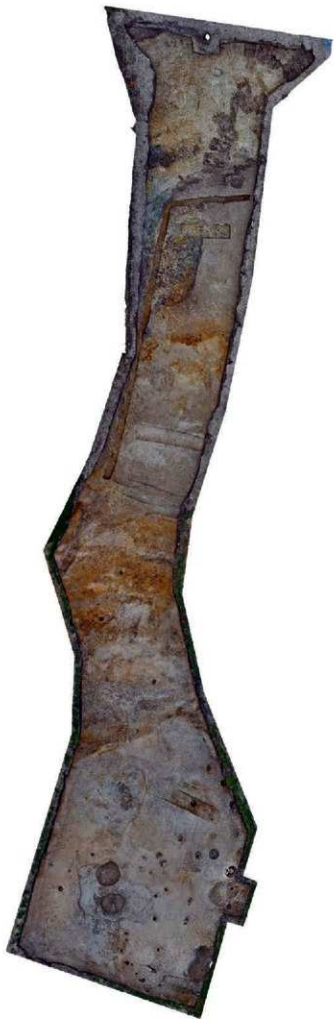
- 石丸恵利子・大近美穂「鏡千人塚遺跡・鏡西谷遺跡出土の中近世煮炊具について」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第8号 2017年
芸文館土器刊行会『復刻芸文館通志』第三巻 1973年
角南聡一郎「野壺の民俗考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告』第162集 2011年
『九州陶磁の福年』九州近世陶磁学会 2000年
長崎巖「おんなの装身具」『日本の美術』第396号

報告書

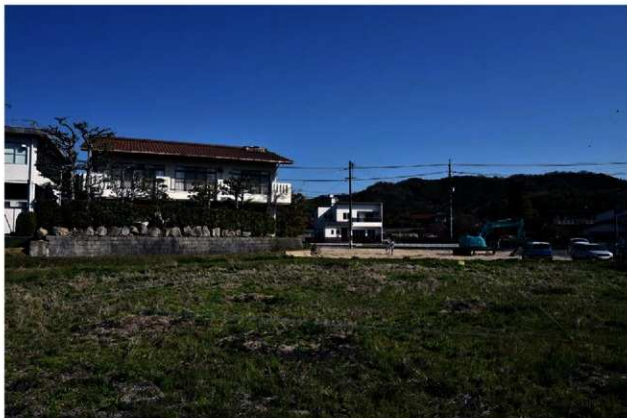
- 鑑治益生「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅶ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 1992年
妹尾周三「大槓1号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第114集 1993年
藤原彰子「溝口1号遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第129集 1994年
三浦正幸「溝口1号遺跡の建物跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第129集 1994年
道上康仁「道照遺跡」『大槓遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集 1985年

図 版





調査区全景3Dモデル
オルソ平面(真上から)



a. 調査前風景(南から)



b. 調査区全景(南西から)

図版 3



a. 調査区全景(南東から)



b. 調査区全景(北から)



c. 調査区南壁土層断面(北東から)



a. 調査区東壁土層断面
(西から)



b. 調査区西壁土層断面
(北東から)



c. SK1・SK2・SX1
完掘状況(南東から)



a. SK1土層断面
(北から)



b. SK2土層断面
(南から)



c. SK3完堀状況
(南から)



a. SK3土層断面
(北から)



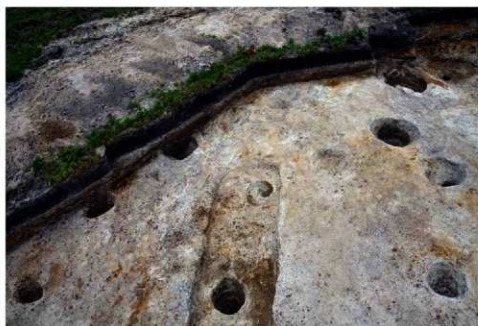
b. SK4完掘状況
(南から)



c. SK4土層断面
(南東から)



a. SA1・SB1・SB2
完掘状況(南から)



b. SA1・SB1・SB2
完掘状況(西から)



c. SB1・SB2根石
検出状況(南西から)



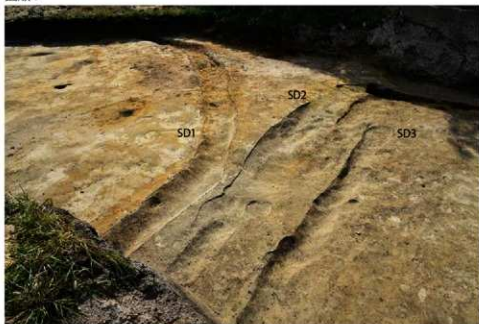
a. SB1-P1土層断面
(北から)



b. SB1-P2根石下段
検出状況(西から)



c. SB1-P2土層断面
(西から)



a. SD 1～3 完掘状況
(北東から)



b. SD1～3
土層断面(西から)



c. SD4完掘状況
(北東から)

a. SD4土層断面
(北東から)



b. SX2完掘状況
(北西から)



c. SX2土層断面
(南西から)





a. SX3竈出土状況
(東から)



b. SX3完掘状況
(南西から)



c. SX3土層断面
(北から)



1



2



3



4



5



6



7



8



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	にしなかがういせきはくつちょうさほうこくしょ 2							
書名	西中郷遺跡発掘調査報告書 2							
副書名	宅地造成工事に係る発掘調査							
編著者名	濱岡大輔							
編集機関	特定非営利活動法人広島文化財センター							
所在地	〒 732-0052 広島市東区光町二丁目 9 番 22 - 601 Ⅱ 082-299-7413							
発行年月日	令和 5 (2023) 年 7 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
西中郷遺跡	<small>ひがしのかしまし</small> 東広島市 <small>さいじょうちゆうたご</small> 西条町田口 <small>あびにしなかがう</small> 字西中郷	34212	876	34 度 23 分 26 秒	132 度 43 分 04 秒	20230403 ～ 20230425	392.5㎡	宅地造成 工事に伴 う調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	集落	江戸時代	掘立柱建物跡 柵列、土坑、溝 ビット	陶磁器、土師質土器 簪		崩または野壺と考え られる整列した 2 つ の土坑		
要約	西条町田口字西中郷において、宅地・水田部分 392.5㎡の発掘調査を実施し、掘立柱建物 2 棟、柵列 1 条、土坑 4 基、溝状遺構 4 条、落ち込み状遺構 3 基を検出し、近世の農家跡であることを確認した。2 つの整列する土坑は崩または野壺と考えられる。							



西中郷遺跡発掘調査報告書 2

発行日 令和5年7月31日

編集・発行 特定非営利活動法人広島文化財センター
〒732-0052 広島市東区光町二丁目9番22-601号

印刷 株式会社ユニバーサルポスト